

第 6 号様式記載の手引

1 この申告書の用途等

- (1) この申告書は、仮決算に基づく中間申告（連結法人以外の法人が行う中間申告に限ります。）、確定した決算に基づく確定申告及びこれらに係る修正申告をする場合に使用します。なお、事業税及び地方法人特別税に係る仮決算に基づく中間申告は、その税額が予定申告に係る税額を超えないときに限り行うことができることに留意してください。
- (2) この申告書は、事務所又は事業所（以下「事務所等」といいます。）所在地の都道府県知事に 1 通を提出してください。
- (3) 法第23条第 1 項第 4 号の 5 イ(1)の規定の適用を受ける法人（無償増資による剰余金又は利益準備金の額の全部若しくは一部を資本金とした法人）にあつては、同号イ(1)に規定する剰余金又は利益準備金の全部若しくは一部を資本金とした事実及び資本金とした金額を証する書類（株主総会議事録、債権者に対する異議申立の公告（官報の抜粋）等）を、同条第 1 項第 4 号の 5 イ(2)の規定の適用を受ける法人（無償減資等による資本の欠損の填補を行った法人）にあつては、同号イ(2)に規定する資本の欠損の填補を行った事実及び資本の欠損の填補に充てた金額を証する書類（株主総会議事録、債権者に対する異議申立の公告（官報の抜粋）等）を、同条第 1 項第 4 号の 5 イ(3)の規定の適用を受ける法人（剰余金を損失の填補に充てた法人）にあつては、同号イ(3)に規定する剰余金を損失の填補に充てた事実及び剰余金を損失の填補に充てた金額を証する書類（株主総会議事録、債権者に対する異議申立の公告（官報の抜粋）、株主資本等変動計算書等）を添付してください。

2 各欄の記載のしかた

欄	記載のしかた	留意事項
1 「※処理事項」		記載する必要はありません。
2 金額の単位区分（けた）のある欄	単位区分に従って正確に記載します。また記載すべき金額が赤字額となるときは、その金額の直前の単位（けた）に△印を付して記載してください。	
3 「法人番号」	法人番号（13桁）を記載します。	
4 「法人名」	法人課税信託の受託者が当該法人課税信託について、この申告書を提出する場合には、当該法人課税信託の名称を併記します。なお、ふりがなは、平仮名又は片仮名で記載します。	
5 「所在地」	本店の所在地を記載します。なお、2 以上の都道府県に事務所等を有する法人が、当該都道府県内に支店等のみを有する場合には、主たる支店等の所在地も併記してください。	
6 「代表者自署押印」及び「経理責任者自署押印」	この申告書の作成時における法人の業務を主宰している者及び経理の責任者（外国法人にあつては、この法律の施行地にある資産若しくは事業の管理又は経営の責任者及び経理の責任者）が自署し、押印します。	2 以上の都道府県に事務所等を有する法人が主たる事務所等以外の事務所等所在地の都道府県知事に提出する申告書については、記名押印で差し支えありません。
7 「この申告の基礎」	法人税に係る修正申告、更正、決定又は再更正を基礎にして修正申告をする場合は、法人税に係る修正申告書を提出し、又は更正、決定若しくは再更正を受けた年月日（当該法人が連結子法人である場合又は連結子法人であった場合には、当該法人との間に連結完全支配関係がある連結親法人若しくは連結完全支配関係があった連結親法人が法人税に係る修正申告書を提出し、又は更正、決定若しくは再更正を受けた年月日）を記載します。	
8 「事業種目」	事業の種類を具体的に、例えば「電気器具製造業」と記載します。なお、2 以上の事業を行う場合にはそれぞれの事業を記載し、主たる事業に○印を付して記載してください。	
9 「期末現在の資本金の額又は出資金の額（解散日現在の資本金の額又は出資金の額）」	期末（中間申告の場合には、その計算期間の末日）現在又は解散日現在における資本金の額又は出資金の額を記載します。	
10 「同上が 1 億円以下の普通法人のうち中小法人等に該当しないもの」	当期末における資本金の額又は出資金の額が 1 億円以下である普通法人が、次のいずれかの法人に該当する場合には、「非中小法人等」を○印で囲んで表示します。 (1) 次のいずれかの法人（以下「大法人」といいます。）との間にこれらの大法人による完全支配関係がある法人	

欄	記載のしかた	留意事項
	(イ) 資本金の額又は出資金の額が5億円以上である法人 (ロ) 法人税法第4条の7に規定する受託法人 (ハ) 相互会社（外国相互会社を含みます。） (2) 当該普通法人との間に完全支配関係がある全ての大法人が有する株式及び出資の全部をいずれか一の大法人が有するものとみなしたときにその一の大法人による完全支配関係があることとなる法人	
11 「期末現在の資本金の額及び資本準備金の額の合算額」	期末現在における資本金の額及び資本準備金の額の合算額を記載します。	
12 「期末現在の資本金等の額」	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれに定める金額を記載します。 (1) 連結申告法人以外の法人（(3)に掲げる法人を除きます。） 法第23条第1項第4号の5イに定める額 (2) 連結申告法人（(3)に掲げる法人を除きます。） 法第23条第1項第4号の5ニに定める額 (3) 保険業法に規定する相互会社 政令第6条の25第1号に定める金額	
13 「道府県民税事業税の地方法人特別税申告書」	空欄は、次のように記載します。 (1) 法人税の中間申告書及び法第72条の26第1項ただし書の規定による申告の場合は、「中間」 (2) 法人税の確定申告書（退職年金等積立金に係るものを除きます。）又は連結確定申告書及び法第72条の25、法第72条の28又は第72条の29の規定による申告の場合は、「確定」 (3) (1)又は(2)に係る修正申告の場合は、「修正中間」又は「修正確定」	修正申告の場合は、「この申告の基礎」の欄も記載します。
14 「法人税法の規定によって計算した法人税額①」	次に掲げる法人税の申告書を提出する法人の区分ごとに、それぞれに定める法人税の申告書の欄の金額を記載します。 (1) 別表1(1)を提出する法人 別表1(1)の10の欄の金額（ただし、別表1(1)の10の欄の上段に記載された金額(使途秘匿金の支出の額の40%相当額)がある場合には、当該金額を加算した合計額を記載します。以下(2)及び(3)においても同じです。） (2) 別表1(2)を提出する法人 別表1(2)の8の欄の金額 (3) 別表1(3)を提出する法人 別表1(3)の8の欄の金額 なお、（ ）内には、使途秘匿金の支出の額の40%相当額（別表1(1)の10の欄の上段に外書として記載された金額、別表1(2)の8の欄の上段に外書として記載された金額又は別表1(3)の8の欄の上段に外書として記載された金額）、連結納税の承認を取り消された場合等における既に控除された法人税額の特別控除額の加算額（別表1(1)の5の欄）、リース特別控除取戻税額（別表1(2)の5の欄又は別表1(3)の5の欄の金額）及び土地譲渡利益金額に対する法人税額（別表1(1)の7の欄、別表1(2)の7の欄又は別表1(3)の7の欄の金額）の合計額を記載します。	(1) 連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。 (2) 2以上の都道府県に事務所等を有する法人は、記載する必要はありません（第10号様式の該当欄に記載します。）。 (3) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
15 「試験研究費の額等に係る法人税額の特別控除額②」	下記の金額はそれぞれ次に定める法人税の申告書の欄の金額を記載します。 (1) 租税特別措置法第42条の4第1項（試験研究費の総額に係る法人税額の特別控除）（同条第2項の規定により読み替えて適用される場合を含む。）の規定に係る金額 法人税の明細書（別表6(6)）の22の欄の金額 (2) 租税特別措置法第42条の4第3項（中小企業者等の試験研究費に係る法人税額の特別控除）（同条第4項又は第5項の規定により読み替えて適用される場合を含む。）の規定に係る金額は記載しないでください。 (3) 租税特別措置法第42条の4第6項（特別試験研究費に係る法	(1) 連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。 (2) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。

欄	記載のしかた	留意事項
	人税額の特別控除の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (8)）の10の欄の金額 (4) 租税特別措置法第42条の 4 第 7 項（平均売上金額の10%相当額を超える試験研究費の額に係る法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (9)）の22の欄の金額 (5) 租税特別措置法第42条の10第 2 項（国家戦略特別区域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額 法人税の明細書（別表 6 (15)）の19の欄の金額 (6) 租税特別措置法第42条の11第 2 項（国際戦略総合特別区域において機械等を取得した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額 法人税の明細書（別表 6 (16)）の19の欄の金額 (7) 租税特別措置法第42条の11の 2 第 2 項（地方活力向上地域において特定建物等を取得した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (18)）の18の欄の金額 (8) 租税特別措置法第42条の12第 1 項、第 2 項及び第 3 項（特定の地域において雇用者の数が増加した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (19)）の38の欄の金額 (9) 租税特別措置法第42条の12の 2 第 1 項（認定地方公共団体の寄附活用事業に関連する寄附をした場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額 法人税の明細書（別表 6 (20)）の10の欄の金額 (10) 租税特別措置法第42条の12の 5 第 1 項（雇用者給与等支給額が増加した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (23)）の22の欄の金額 （注）企業立地の促進等による地域における産業集積の形成及び活性化に関する法律の一部を改正する法律（平成 29 年法律第 47 号）の施行の日以後に変更 (7) 租税特別措置法第 42 条の 11 の 2 第 2 項（地域経済牽引事業の促進区域内において特定事業用機械等を取得した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (17)）の 18 の欄の金額 (8) 租税特別措置法第42条の11の 3 第 2 項（地方活力向上地域において特定建物等を取得した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (18)）の18の欄の金額 (9) 租税特別措置法第42条の12第 1 項、第 2 項及び第 3 項（特定の地域において雇用者の数が増加した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (19)）の38の欄の金額 (10) 租税特別措置法第42条の12の 2 第 1 項（認定地方公共団体の寄附活用事業に関連する寄附をした場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額 法人税の明細書（別表 6 (20)）の10の欄の金額 (11) 租税特別措置法第42条の12の 5 第 1 項（雇用者給与等支給額が増加した場合の法人税額の特別控除）の規定に係る金額（中小企業者等を除きます。） 法人税の明細書（別表 6 (23)）の22の欄の金額	
16 「還付法人税額等の控除額③」	第 6 号様式別表 2 の 3 の④の計欄の金額を記載します。	(1) 連結法人及び連結法人であった法人は、記

欄	記載のしかた	留意事項
		載しないでください。 (2) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
17 「退職年金等積立金に係る法人税額④」	法人税の申告書（別表19）の12の欄の金額を記載します。	(1) 連結法人及び連結法人であった法人は、記載しないでください。 (2) 2以上の都道府県に事務所等を有する法人は、記載する必要はありません。 (3) 第6号の2様式の申告書を提出すべき法人も記載します。 (4) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
18 「課税標準となる法人税額又は個別帰属法人税額 ①+②-③+④ ⑤」	(1) 次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれ次に定める金額を記載します。 (イ) 連結法人及び連結法人であった法人以外の法人で、一の都道府県にのみ事務所等を有する法人 ①+②-③+④の金額 (ロ) 連結法人及び連結法人であった法人以外の法人で、2以上の都道府県に事務所等を有する法人 第10号様式の⑤の欄の金額 (ハ) 連結法人及び連結法人であった法人 第6号様式別表1の⑦の欄の金額 (2) この金額に1,000円未満の端数があるとき、又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
19 「2以上の道府県に事務所又は事業所を有する法人における課税標準となる法人税額又は個別帰属法人税額⑥」	2以上の都道府県に事務所等を有する法人が第10号様式の道府県民税の「分割課税標準額」の欄の当該都道府県分の金額を記載します。	(1) 一の都道府県にのみ事務所等を有する法人は、記載する必要はありません。 (2) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
20 「法人税割額（⑤又は⑥× $\frac{\quad}{100}$ ）⑦」	一の都道府県にのみ事務所等を有する法人は⑤の欄の金額に、2以上の都道府県に事務所等を有する法人は⑥の欄の金額に税率を乗じて計算します。	(1) 税額の計算を行う場合の税率は、各都道府県ごとに定められた税率を用います。 (2) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
21 「道府県民税の特定寄附金税額控除額⑧」	第7号の3様式の⑳の欄の金額を記載します。	都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
22 「外国の法人税等の額の控除額⑨」	第7号の2様式（その1）の㉑の欄の金額（2以上の都道府県に事務所等を有する法人にあっては、㉒の欄の当該都道府県分の金額）を記載します。	都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、記載しないでください。
23 「差引法人税割額 ⑦-⑧-⑨-⑩ ⑪」	この金額に100円未満の端数があるとき、又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	

欄	記載のしかた	留意事項
	なお、都道府県内に恒久的施設を有する外国法人は、第6号様式別表1の2の⑩の欄の金額を記載してください。	
24 「既に納付の確定した当期分の法人税割額⑫」	既に納付の確定した当期分の法人税割額を記載し、法人税法第89条（同法第145条の5において準用する場合を含みます。）の規定により法人税に係る申告書を提出する義務がある法人がこの申告書を提出するときは、第6号の2様式の申告書の③の欄の金額についても記載します。	
25 「租税条約の実施に係る法人税割額の控除額⑬」	「⑪の欄の金額－⑫の欄の金額」と「租税条約の実施に係る更正に伴う法人税割額」とのいずれか少ない金額を記載します。 この場合において、その金額が負数となるときは記載しないでください。	
26 「算定期間中において事務所等を有していた月数⑮」	この月数は、暦に従って計算し、1月に満たないときは1月とし、1月に満たない端数を生じたときは切り捨てて記載します。	算定期間中に事務所等又は寮等の新設又は廃止があった場合は、その月数には新設又は廃止の日を含みます。
27 「円× $\frac{⑮}{12}$ ⑯」	この金額に100円未満の端数があるときは、その端数金額は切り捨てた金額を記載します。	均等割の税率区分の基準は、「期末現在の資本金の額及び資本準備金の額の合算額」又は「期末現在の資本金等の額」のいずれか大きい方の額を用います。 ただし、「期末現在の資本金の額又は出資金の額（解散日現在の資本金の額又は出資金の額）」の欄に出資金の額を記載した場合には、出資金の額又は「期末現在の資本金等の額」のいずれか大きい方の額を用いてください。
28 「この申告により納付すべき道府県民税額 ⑭＋⑮ ⑰」	⑭又は⑮の欄に△印を付して記載した場合におけるこの欄の計算については、⑭又は⑮の欄を零として計算します。	
29 「⑰のうち見込納付額⑳」	法人税法第75条の2第1項（同法第144条の8において準用する場合を含みます。）の規定により確定申告書の提出期限が延長されている法人が道府県民税につき申告書の提出前に納付した金額又は同法第81条の24第1項の規定により連結確定申告書の提出期限が延長されている法人（当該法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人（連結申告法人に限りません。）を含みます。）が道府県民税につき申告書の提出前に納付した金額を記載します。	
30 「東京都に申告する場合の㉑の計算」（㉒から㉓までの欄）	東京都に申告する場合に記載します。	東京都以外の道府県に申告する場合は、記載する必要はありません。 恒久的施設を有する外国法人については、法人税法第141条第1号イに掲げる国内源泉所得に対する法人税額及び同号ロに掲げる国内源泉所得に対する法人税額の計算の別を明らかにして記載してください。

欄	記載のしかた	留意事項
31 事業税の「所得割」 (㉔から㉑までの欄)	(1) ㉔の欄は、第6号様式別表5を添付する法人にあっては同表の㉓の欄の金額を、その他の法人にあってはこの申告書の㉔の欄の金額から㉕の欄の金額を控除した金額を記載します。 (2) ㉔から㉑までの各欄の課税標準の額は、次に掲げる法人の区分に応じそれぞれ次に定める金額を記載します。 (イ) 2以上の都道府県に事務所等を有する法人 第10号様式の事業税の「分割課税標準額」の欄のうち、当該都道府県分の金額を記載します。 (ロ) 一の都道府県にのみ事務所等を有する法人 ㉔の欄の金額が年400万円（その事業年度が1年に満たない場合には、400万円にその事業年度の月数（月数は暦に従い計算し、1月に満たない端数を生じたときは、1月とします。）を乗じて12で除して得た金額。以下同じ。）以下であるときはその金額を㉔の欄に、年400万円を超え年800万円（その事業年度が1年に満たない場合には、800万円にその事業年度の月数（月数は暦に従い計算し、1月に満たない端数を生じたときは、1月とします。）を乗じて12で除して得た金額。以下同じ。）以下であるときはこれを年400万円以下の金額及び年400万円を超え年800万円以下の金額に区分してそれぞれ㉔及び㉕の各欄に、年800万円を超えるときはこれを年400万円以下の金額、年400万円を超え年800万円以下の金額及び年800万円を超える金額に区分して、それぞれ㉔、㉕及び㉖の各欄に記載します。 (ハ) 特別法人（協同組合等）であって次の(ニ)に該当しないものの 所得金額が年400万円以下であるときはその金額を㉔の欄に、年400万円を超えるときは年400万円以下の金額を㉔の欄に、年400万円を超える金額を㉕の欄にそれぞれ記載します。 (ニ) 租税特別措置法第68条第1項の規定に該当する法人 所得金額が年400万円以下であるときはその金額を㉔の欄に、年400万円を超え年10億円（その事業年度が1年に満たない場合には、10億円にその事業年度の月数（月数は暦に従い計算し、1月に満たない端数を生じたときは、1月とします。）を乗じて12で除して得た金額。以下同じ。）以下であるときは年400万円以下の金額を㉔の欄に、年400万円を超え年10億円以下の金額を㉕の欄に、また、年10億円を超えるときは年400万円以下の金額を㉔の欄に、年400万円を超え年10億円以下の金額を㉕の欄に、年10億円を超える金額を㉖の欄にそれぞれ記載します。 (3) ㉑の欄の課税標準の額は、法第72条の24の7第3項の規定により軽減税率が適用されない法人がその所得金額を記載します。なお、2以上の都道府県に事務所等を有する法人は、第10号様式の事業税の「分割課税標準額」の欄のうち、当該都道府県分の金額を記載してください。 (4) ㉔から㉑までの各欄の課税標準の額に1,000円未満の端数があるとき又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨て、税額に100円未満の端数があるとき又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	(1) 収入金額課税法人（電気供給業、ガス供給業、保険業及び貿易保険業を行う法人）は、記載する必要はありません。 (2) その事業年度が1年に満たない場合において、㉔の欄の金額が400万円を超え800万円以下であるときの㉔の欄の金額は、㉔の欄の金額から㉔の欄の金額（端数を切り捨てる前の金額）を控除して算出し、㉔の欄の金額が800万円を超えるときの㉔の欄の金額は、㉔の欄の金額から㉔及び㉕の各欄の金額（端数を切り捨てる前の金額）を控除して算出します。 (3) 軽減税率の適用されない法人とは、事業年度の末日（解散した法人にあっては、解散の日）において、3以上の都道府県に事務所等を設けて事業を行う法人で資本金の額又は出資金の額が1,000万円以上の法人をいいます。 (4) 都道府県内に恒久的施設を有する外国法人にあっては、法人税法第141条第1号イに掲げる国内源泉所得に係る所得の金額（当該国内源泉所得が欠損金額である場合には、零とします。）及び同号ロに掲げる国内源泉所得に係る所得の金額（当該国内源泉所得が欠損金額である場合には、零とします。）の合算額を㉖の欄に記載します。
32 「付加価値割」 (㉒及び㉓の欄)	(1) ㉒の欄は、法第72条の2第1項第1号イに掲げる法人（外形対象法人）が、第6号様式別表5の2の㉑の欄の金額を記載します。 (2) ㉓の欄の課税標準の額は、一の都道府県にのみ事務所等を有する法人にあっては㉓の欄の金額を記載し、2以上の都道府県に事務所等を有する法人にあっては第10号様式の事業税の「分	

欄	記載のしかた	留意事項
	割課税標準額」の欄の当該都道府県分の金額を記載します。 この場合において課税標準の額に1,000円未満の端数があるとき又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨て、税額に100円未満の端数があるとき又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	
33 「資本割」 (㉔及び㉕の欄)	(1) ㉔の欄は、法第72条の2第1項第1号イに掲げる法人（外形対象法人）が、第6号様式別表5の2の㉔の欄の金額を記載します。 (2) ㉕の欄の課税標準の額は、一の都道府県にのみ事務所等を有する法人にあつては㉔の欄の金額を記載し、2以上の都道府県に事務所等を有する法人にあつては第10号様式の事業税の「分割課税標準額」の欄の当該都道府県分の金額を記載します。 この場合において課税標準の額に1,000円未満の端数があるとき又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨て、税額に100円未満の端数があるとき又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	
34 「収入割」 (㉖及び㉗の欄)	収入金額課税法人のみが次のように記載します。 (1) ㉖の欄は、電気供給業及びガス供給業を行う法人にあつては第6号様式別表6の⑦の欄の金額を、生命保険会社又は外国生命保険会社等にあつては第6号様式別表7の⑤の欄の金額を、損害保険会社又は外国損害保険会社等にあつては第6号様式別表8の⑦の欄の金額を、少額短期保険業者にあつては同表の⑱の欄の金額を、株式会社日本貿易保険にあつては同表の㉓の「課税標準」の欄の金額を記載します。 (注) 原子力損害賠償・廃炉等支援機構法の一部を改正する法律（平成29年法律第30号）の施行の日以後に変更 (1) ㉖の欄は、電気供給業及びガス供給業を行う法人にあつては第6号様式別表6の⑧の欄の金額を、生命保険会社又は外国生命保険会社等にあつては第6号様式別表7の⑤の欄の金額を、損害保険会社又は外国損害保険会社等にあつては第6号様式別表8の⑦の欄の金額を、少額短期保険業者にあつては同表の⑱の欄の金額を、株式会社日本貿易保険にあつては同表の㉓の「課税標準」の欄の金額を記載します。 (2) ㉗の欄の課税標準の額は、一の都道府県にのみ事務所等を有する法人にあつては㉖の欄の金額を記載し、2以上の都道府県に事務所等を有する法人にあつては第10号様式の事業税の「分割課税標準額」の欄の当該都道府県分の金額を記載します。 この場合において課税標準の額に1,000円未満の端数があるとき又はその全額が1,000円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨て、税額に100円未満の端数があるとき又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	
35 「平成28年改正法附則第5条の控除額㉙」	地方税法等の一部を改正する等の法律（平成28年法律第13号）附則第5条第2項から第7項までの規定による事業税額の控除の適用を受ける法人 が、次に掲げる事業年度の区分に応じそれぞれ次に定める金額を記載します。 (1) 平成28年4月1日から平成29年3月31日までの間に開始する事業年度 第6号様式別表5の7の「③が30億円以下の場合の控除額㉙」の欄の金額又は「③が30億円超40億円未満の場合の控除額㉚」の欄の金額 (2) 平成29年4月1日から平成30年3月31日までの間に開始する事業年度 第6号様式別表5の7の「③が30億円以下の場合の	

欄	記載のしかた	留意事項
	控除額⑬」の欄の金額又は「③が30億円超40億円未満の場合の控除額⑰」の欄の金額 (3) 平成30年4月1日から平成31年3月31日までの間に開始する事業年度 第6号様式別表5の7の「③が30億円以下の場合の控除額⑳」の欄の金額又は「③が30億円超40億円未満の場合の控除額㉑」の欄の金額	
36 「事業税の特定寄附金税額控除額㉒」	第7号の3様式の㉑の欄の金額を記載します。	
37 「差引事業税額㉓－㉔－㉕ ㉖」	この金額に100円未満の端数があるとき、又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	
38 「租税条約の実施に係る事業税額の控除額㉗」	「㉘の欄の金額－㉙の欄の金額」と「租税条約の実施に係る更正に伴う事業税額」とのいずれか少ない金額を記載します。 この場合において、その金額が負数となるときは記載しないでください。	
39 「この申告により納付すべき事業税額㉚－㉛－㉜ ㉝」及び「㉞の内訳」の各欄（㉞から㉟までの欄）	㉞の欄は、㉘の欄から㉙の欄及び㉚の欄の金額を控除した金額を記載し、㉞から㉟までの欄は、その割ごとの内訳の金額をそれぞれ記載します。この場合において、㉞から㉟までの欄に負数が生じるときであっても、△印を付してそのまま記載します。	「㉞の内訳」の各欄の記載における㉞の欄の金額の控除については、㉟の欄、㉞の欄の順に行います。 「㉞の内訳」の各欄の記載における㉞の欄の金額の控除については、㉞の欄、㉟の欄、㉞の欄の順に行います。
40 「㉞のうち見込納付額㉟」	㉟の欄は、法第72条の25第3項又は第5項（法第72条の28第2項及び第72条の29第2項においてこれらの規定を準用する場合を含みます。）の規定により確定申告書の提出期限が延長されている法人が事業税につき当該申告書の提出前に納付した金額を記載します。	
41 「差引㉞－㉟ ㊱」	㊱の欄は、㉞の欄から㉟の欄の金額を控除した金額を記載します。	
42 「所得割に係る地方法人特別税額㊲」（㊲の内訳）	「課税標準」の欄は、標準税率が適用される法人については、「計㊳」又は「軽減税率不適用法人の金額㊴」の「税額」の欄の金額を記載し、 <u>標準税率以外の税率が適用される法人については、第6号様式別表14の「計㊵」又は「軽減税率不適用法人の金額㊶」の「基準法人所得割額」の欄の金額を記載します。</u>	
43 「収入割に係る地方法人特別税額㊷」（㊷の内訳）	「課税標準」の欄は、標準税率が適用される法人については、「収入金額㊸」の「税額」の欄の金額を記載し、 <u>標準税率以外の税率が適用される法人については、第6号様式別表14の「収入金額㊹」の「基準法人収入割額」の欄の金額を記載します。</u>	
44 「差引地方法人特別税額㊸－㊹ ㊺」	この金額に100円未満の端数があるとき、又はその全額が100円未満であるときは、その端数金額又はその全額を切り捨てた金額を記載します。	
45 「租税条約の実施に係る地方法人特別税額の控除額㊻」	「㊼の欄の金額－㊽の欄の金額」と「租税条約の実施に係る更正に伴う地方法人特別税額」とのいずれか少ない金額を記載します。 この場合において、その金額が負数となるときは記載しないでください。	
46 「この申告により納付すべき地方法人特別税額㊼－㊽－㊾ ㊿」	㊿の欄は、㊼の欄から㊽の欄及び㊼の欄の金額を控除した金額を記載します。	
47 「㊿のうち見込納付額㊿」	事業税の確定申告書の提出期限が延長されている法人が、地方法人特別税につき、当該申告書の提出前に納付した金額を記載します。	
48 「差引㊿－㊿ ㊿」	㊿の欄は、㊿の欄から㊿の欄の金額を控除した金額を記載しま	

欄	記載のしかた	留意事項
	す。	
49 「所得金額の計算の内訳」 (㉔から㉙までの欄)	第6号様式別表5を添付する法人以外の法人が、次のように記載します。 (1) ㉔の欄は、連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書(別表4)の33の欄の金額を、連結申告法人にあつては法人税の明細書(別表4の2付表)の41の欄の金額を記載します。 ただし、連結申告法人について、法人税の明細書(別表4の2付表)の7の欄に記載された金額がある場合には、その金額を41の欄の金額に加算した金額を記載してください。 (2) ㉕の欄は、連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書(別表4)の33の欄の計算上損金の額に算入している所得税額及び復興特別所得税額がある場合において、連結申告法人にあつては法人税の明細書(別表4の2付表)の41の欄の計算上損金の額に算入している所得税額及び復興特別所得税額がある場合において、当該所得税額及び復興特別所得税額を記載します。したがって、法人税法第40条又は第81条の7の規定により納付した所得税額及び復興特別所得税額を損金の額に算入していない場合には記載する必要はありません。 (3) ㉖の欄は、法人税の明細書(別表12(1))の5の欄の金額又は10の欄の金額のいずれか低い金額(法の施行地外において行う資源開発事業等に係る特定株式等に関する部分の金額に限ります。)を記載します。 (4) ㉗の欄は、法人税の明細書(別表12(1))の「益金算入額の計算」の欄の25及び26の計欄の金額の合計額(法の施行地外において行う資源開発事業等に係る特定株式等に関する部分の金額に限ります。)を記載します。 (5) ㉘の欄は、外国の事業に帰属する所得以外の所得に対して課された外国法人税の額について法人税法第69条又は第81条の15に規定する外国税額の控除の適用を受ける金額を有する法人が外国の事業に帰属する所得以外の所得に対して課された外国法人税の額のうち、連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書(別表4)の30の欄に記載した金額を、連結申告法人にあつては法人税の明細書(別表4の2付表)の38の欄に記載した金額を記載します。 (6) ㉙の欄は、第6号様式別表9の④の「計」の欄の金額又は法人税法第59条の規定の適用を受けようとする法人が第6号様式別表10の⑨の欄、同表の㉑の欄若しくは第6号様式別表11の㉒の欄の金額を記載します。	
50 「法人税の所得金額又は個別所得金額㉚」	連結申告法人以外の法人にあつては法人税の明細書(別表4)の48の欄の所得金額又は欠損金額を、連結申告法人にあつては法人税の明細書(別表4の2付表)の55の欄の個別所得金額又は個別欠損金額を記載します。	
51 「法第15条の4の徴収猶予を受けようとする税額㉛」	2以上の都道府県に事務所等を有する法人が修正申告に係る税額につき徴収猶予を受けようとする場合において第1号様式による届出書に代えようとするものが記載します。この場合において記載する金額は、㉜、㉝及び㉞の欄に記載した金額の合計額と同額になります。	
52 「還付請求」の「中間納付額㉟」	中間納付額の還付を受けようとする場合において還付請求書に代わるものとして記載することができます。この場合において、還付請求額として記載する額は、㉜の欄又は㉝の欄に△印を付した法人税割額又は均等割額と、㉞の欄に記載した事業税額及び㉞の欄に記載した地方法人特別税額との合計額と同額になります。	
53 「法人税の期末現在の資本金等の額又は連結個別資本金等の額」	法人税法第2条第16号に規定する資本金等の額又は同条第17号の2に規定する連結個別資本金等の額(保険業法に規定する相互会社にあつては、純資産額)を記載します。	
54 「法人税の当期の確定	次に掲げる法人の区分ごとに、それぞれ次に定める金額を記載	

欄	記載のしかた	留意事項
税額又は連結法人税個別 帰属支払額	します。 (1) 連結申告法人以外の法人 当該事業年度の当該法人に係る法人税額（当該金額のうちに特別控除取戻税額等がある場合には、当該特別控除取戻税額等を控除した額） (2) 連結申告法人 当該連結事業年度の当該連結法人に係る連結法人税個別帰属支払額（当該金額のうちに個別帰属特別控除取戻税額等がある場合には、当該個別帰属特別控除取戻税額等を控除した額）	
55 「申告期限の延長の処分（承認）の有無」の「事業税」	法第72条の25第2項から第7項まで（法第72条の28第2項及び第72条の29第2項においてこれらの規定を準用する場合を含みます。）の規定により申告期限の延長の処分を受けている法人は「有」を、その他の法人は「無」を○印で囲んで表示します。	
56 「申告期限の延長の処分（承認）の有無」の「法人税」	次に掲げる法人は「有」を、その他の法人は「無」を○印で囲んで表示します。 (1) 法人税法第75条の2第1項（同法第144条の8において準用する場合を含みます。）の規定により法人税の確定申告書の提出期限が延長されている連結申告法人以外の法人（同法第75条の2第8項（同法第144条の8において準用する場合を含みます。）において準用する同法第75条第5項の規定により当該提出期限が延長されたものとみなされた場合を含みます。） (2) 連結申告法人のうち、法人税法第81条の24第1項の規定により法人税の連結確定申告書の提出期限が延長されている連結親法人（同条第3項の規定において準用する同法第75条第5項の規定により当該提出期限が延長されたものとみなされた場合を含みます。）及び当該法人との間に連結完全支配関係がある連結子法人	
57 「法人税の申告書の種類」	次に掲げる法人税の申告書を提出する法人の区分ごとに、それぞれ次に定める申告書の種類を○印で囲んで表示します。 (1) 法人税法第2条第37号に規定する青色申告書を提出する法人「青色」 (2) その他の申告書を提出する法人「その他」	
58 「翌期の中間申告の要否」	次に掲げる法人は「要」を、その他の法人は「否」を○印で囲んで表示します。 (1) 連結申告法人以外の法人にあつては、当該事業年度の当該法人に係る法人税額（当該金額のうちに特別控除取戻税額等がある場合には、当該特別控除取戻税額等を控除した額）に6を乗じて得た金額を当該事業年度の月数で除して計算した金額が10万円を超える法人（翌期に法人税法第71条第1項及び第144条の3第1項（同法第72条第1項及び第144条の4第1項の規定が適用される場合を含みます。）の規定により中間申告をする必要のされる法人を含みます。） (2) 連結申告法人にあつては、当該連結事業年度の当該連結法人に係る連結法人税個別帰属支払額（当該金額のうちに個別帰属特別控除取戻税額等がある場合には、当該個別帰属特別控除取戻税額等を控除した額）に6を乗じて得た金額を当該連結事業年度の月数で除して計算した金額が10万円を超える法人	
59 「国外関連者の有無」	外国（わが国と租税条約を締結している国に限ります。）に子会社又は親会社等（租税特別措置法第66条の4の規定に該当する法人）を有する法人は「有」を、その他の法人は「無」を○印で囲んで表示します。	
60 「次回以降申告書（予定申告書を含む。）及び申告書記載の手引の送付を希望しない方は、右欄にチェックしてください。※納付書は送付しない。」	神奈川県では、申告書用紙等の送付を希望しない旨を申し出た法人には、申告書（予定申告書を含みます。）及び申告書記載の手引を送付しないこととしています。 次回以降、申告書用紙等の送付を希望しない場合は、「✓」を記入してください。 市販の会計ソフト等で作成した申告書の場合は、申告書の下部	申告書用紙等を送付しない場合でも、<u>納付書は送付します。</u> <u>なお、申告書、納付書及び申告書記載の手引は、県税のホームページ</u>

欄	記載のしかた	留意事項
す。」	余白に「次回以降申告書用紙等の送付を希望しない」旨を記入してください。	<u>からダウンロードすることができます。</u> 県税便利帳 検索